

## 常に真価を問われている

私は、古典落語に魅力を感じて、長い期間親しんでまいりました。古い落語家では三遊亭圓生が特に好きで、三代目古今亭志ん朝師匠とはなぜか縁があり、会食の席に同席したこともあります。ですが最近では寄席に行くことも遠ざかっております。

最近読んだ本に「**大事なことはすべて立川談志（ししゅう）に教わった**」（立川談慶著 KKベストセラーズ刊）があります。著者は1965年に長野県に生まれ、慶應義塾大学経済学部を卒業後、株式会社ワコールを経て1991年、立川談志に入門しました。前座名は立川ワコール。2000年、二つ目に昇進して談慶に。2005年真打昇進とのことです。

本書には立川談志一門に弟子入りし「見習い」「前座」「二つ目」「真打ち」になるまでの19年間の悪戦苦闘の日々が書き綴られています。前座暮らしは9年半続き、2000年に二つ目昇進して談慶、2005年に真打にスピード昇進を果たしたわけです。

この本で知ることになりましたが、立川流の真打ち昇進の基準は1、古典落語百席2、二つ目よりも歌舞音曲、パーティの開催など、さらに質量ともに内容を問われるとありました。

人は誰しも仕事を覚え自分のものにする、いわば修行中の身という時期があります。私は著者がこの19年間人並以上に芸道に精進し、談志師匠の厳しく妥協を許さずときには理不尽極まりない指導に耐え、それに自己の創意工夫を加えて真打ちに昇り詰めていく様子を知り、ひとつは落語界にあって立川流の実力の水準がいかにか確かなものなのだと納得させられました。ここ数年の間、落語界でも何人かの真打ちが誕生したわけですが、なかには「？」と感じた人も多々あることも記憶しております。

これはビジネスの世界において、独立や起業することへのそれぞれのプロセスも同様で、一步一步確実に精進して歩を進めていくことは同様なのだと理解させられました。ビジネスの世界で、ようやく独立・起業出来たとしたら、これは落語界では「二つ目」と云うところでしょうか。そしてこれらの共通項として感じることは、いくら本人が汗と涙の修業だと精進努力したところで、事はそう簡単には成らず、他の人からの厳しい導きや温かな支援があってはじめて可能なことなのだと思います。

落語界で真打ちになつての真価というのは来場のお客様の「笑い」がどれほど多くとれるか否かであると書かれています。

これはビジネスの世界では売上げが立ち、利益をいくら残せるか。そしてどの位の期間、事業の継続を果たせるかなどということでしょう。これによりビジネスの真価が問われているのです。

大相撲の秋場所をTV観戦していて、この角界も他と同様に、早く目標をもって常々人の2倍も3倍も稽古して番付けが上がる世界と理解します。世に知られる十両以上の関取になるか、通路で勝敗のついた力士を待っている付け人で終るかはまさに稽古次第です。その意味で演芸、ビジネス、角界もすべて他から常に冷静に真価を問われているのだと思います。